

日ノ新聞之部

REEL No. 1-0326

0382

明治十二年十月十五日

○琉球事件ト「ランド」氏ノ關係

嚮ニ清廷ノ内閣大臣カ北京ニ於テ米國前大統領
 領テラント氏ニ我が政府ノ琉球處分ノ條理ナ
 ラザルヲ訴ヘテ日清ノ紛紜ヲ仲裁セシメテ同
 氏ニ懇請シ又々我が政府ノ内閣參議カ嘗テ日光
 ニ於テ「ランド」氏ニ我が政府ノ琉球ヲ處分シタル理由
 ヲ開陳シテ同氏ノ審考ヲ仰ガレタル次第ハ我
 輩疾クニ之ヲ當時ニ聞知セザルニ非ズト虽モ
 事外交ノ機密ニ関スルヲ以テ未ダ敢テ之ヲ紙
 上ニ登記シテ讀者ニ報道スルノ自由ヲ得ザリシ
 ニ夫ノ自由出版國ノ新聞記者タルジヨシ、ルツ
 セル、ヨシグ氏(新紐ヘラルド新聞ノ通信記者ニ
 シテ「ランド」氏ノ書記官ナリ)ハ毫モ忌憚スル
 所ナク亦タ聊モ牽制セラル。所ナク早ク既ニ
 事ノ顛末ヲ直筆ニ詳記メ之ヲ新紐ナル本社ニ
 電報若クハ郵報ニ新紐ヘラルド新聞ハ便ハナ
 猶豫セズ之ヲ其ノ紙上ニ登載シタルヲ以テ
 我輩ガ未ダ敢テ紙上ニ登記スルノ自由ヲ得サリ
 シ外交ノ機密即チ琉球事件ト「ランド」氏ノ関
 繫ハ却テ先ツ數千里外ナル米國ノ新聞紙ニ發
 露シ米國ノ新聞讀者ヲシテ先ツ我が外交ノ機
 密ヲ聞知セシメ我邦ノ新聞讀者ヲシテ却テ燈
 臺モトクテハノ嘆ヲ懷カシメタルハ常套ナガ
 ラ我輩ガ頗ル憾ミ且ツ歎スル所ナリ
 茲ニ新紐ヘラルド新聞ニ於テ琉球事件ト「ラン

外務省

ト氏ノ關係ヲ按スルニジヨン、ルツセルヨング
氏ノ電報(七月二十九日横濱發)ニ曰ク今ヤカ
ニト氏ハ國ヲズモ東洋ノ政論ニ煩ハサル嚮ニ
同氏ノ清國北部ニ遊ブヤ清廷ノ大臣恭親王及
ヒ李中堂ヨリ琉球處分ニ関スル日清兩國ノ紛
紜ヲ仲裁センコトヲ同氏ニ懇請セラレタルニ
キ氏ハ之ニ答テ琉球處分ニ付テハ蓋シ日本政
府ニ於テモ必ス言張ルベキ理由アルベク且ツ
日清ノ紛紜ヲ和解スルハ吾人ノ共ニ好ム所ナ
リト雖モ余ハ今マ此ノ事ニ立入ルベキ權理ヲ
有セスト陳述セラレタルコトアリシガ日本政府
ハ清廷ノ大臣ガ仲裁ヲ格蘭ト氏ニ懇請シタ
ルヲ聞テ默止ニ付セス氏ガ日本ニ來着シテ日

外務省

光ニ遊寓スルニ當リ日本政府ノ内閣參議ハ故
ラニ日光ニ來リ覺書ニ授テ親ミク格蘭ト氏
ニ琉球ノ事情ヲ詳説シ且ツ明ニ琉球處分ノ理
由ヲ開陳シテ氏ノ審考ヲ仰カレタリ而シテ日
本政府ノ開陳スル所ニ批レバ琉球ノ日本帝國
ノ隸屬タル蓋シ論弁ヲ費サズシテ夫レ明白ナ
ルカ如シ云々
又タヨング氏が日光ヨリ七月二十三日附ヲ以
テ書送シタル琉球事件ニ関スル長文ノ通信ハ
載セテ九月一日刊行ノ新報ヘラルド新聞ニ在
リ我輩イマ其要略ヲ左ニ記出セシ清廷ノ恭親
王及ヒ李中堂ハ帝ニ北京ニ於テ格蘭ト氏ニ
日清紛紜ノ仲裁ヲ懇請シタルノミナラズ又々

東京駐劄清使ニ氏ガ日本ニ來着スルノ日ヲ待
 テ尚ホ琉球處分ノ事ヲ訴フベキ旨ヲ命シタル
 ニ付キ氏ノ日本ニ着スルヤ清使何氏張氏ハ本
 國大臣ノ旨ヲ傳ヘテ氏ニ面謁シ且ツ書ヲ以テ
 琉球處分ノ事ヲ訴ヘントシタル派清使ニ向テ
 抑モ琉球ニ関スル貴國ノ請求ヲ聞クハ寔ニ宋
 國公使ビレハム君ノ職務ニ屬スルガ故ニ余ハ
 先ツ宋國公使ビレハム君ニ事ノ顛末ヲ語り時
 宜ニヨリテハ日本政府ニモ之ヲ語スベシト貴
 國ノ恭親王及ヒ李中堂ニ約言シタルニ付キ今
 之公然ト其書ヲ領シ其訴ヲ聽クハ余ガ敢テ為
 シ能ハザル所ナレト只タ私ニ其事情ヲ承ハル
 ハ敢テ差支ナカルベシト陳説シテ後チニ清使
 ヨリ差出シタル覺書ヲ受取ラレタリ其覺書ハ
 概テ二段ニ分ケテ第一段ニハ琉球ハ清廷ニ隸
 屬スベキノ意ヲ述べ第二段ニハ日本政府ノ琉球
 處分ヲ非論ス其第一段ノ要領ニ曰ク琉球國王
 ハ襲位ゴトニ清帝ノ勅許ヲ請願スルヲ以テ例
 視トス。清帝ノ即位ゴトニ琉球國ヨリ使節ヲ
 清國ニ派遣ス其即位ヲ賀ス。琉球ヨリ二年ゴ
 トニ硫黃銅鉛等ヲ清廷ニ貢納ス。琉球或ルノ
 少年ハ清廷ノ大學ニ入学スルヲ許サル。琉
 球ノ水夫若シ清國海岸ニ於テ難船スル寸ハ之
 ヲ救助シ且ツ其本國ニ送還ス。清國ト琉球ノ
 和親ハ紀元五百八十九年ヨリ連續スルモノナ
 リ。福建ノ清人三十六族ハ球民ヲ開化ニ誘導

外務省

センガ為メニ琉球ニ移住ヲ命セラレタリ。琉
球ハ常ニ清廷ノ正朔ヲ奉シ且ツ清國ノ文字ヲ
用ヒタリ云々而シテ第二段ノ要領ハ重ニ琉球
ノ沿革ニテ千八百七十二年ヨリ今日ニ至ルマ
テ日本政府ガ清廷ニ相談モナク琉球ヲ藩トシ
縣トシタルハ甚カ不條理ナリト云フニ過キガ
ルガ如シ (以下次號)

外務省

明治十二年十月十六日

琉球事件トグランド氏ノ関繫

右ノ如ク清廷ハ不満ヲ日本政府、琉球處分ニ懐
テ頗リニ云々シタレド日本政府ニ於テハ琉球
ハ明カニ日本ノ隸屬ナルガ故ニ其專斷ヲ以テ
之ヲ処分スルハ固ヨリ当然ノナリト確信シ
清廷ガ不満ヲ日本政府ノ琉球処分ニ懐テ云々
セントハ思ヒモ寄ラズ嚮ニグランド氏が長崎
ニ來着シテ吉田全權公使ニ清廷ノ事情ヲ語ラ
レタル時ニ至リテ初メテ清廷ニ如是ノ不満ノ
存在スルヲ聞知シテ大ニ驚キタル程ノ始末ナ
レハグランド氏ノ來着以前ニハ日本政府ハ風
説ノ如何ニ拘ハラズ清廷ヲ以テ決シテ不平ヲ

外務省

琉球処分ニ懐クモノニ非ラズト看做シ夫ノ清
使何氏張氏ヨリ昨年十月七日ヲ以テ日本外務
省ニ差出シタル穩當ナラザル公唇(其畧ニ曰ク
琉球ノ我が清國ノ隸屬タルハ歐米諸國ノ共ニ
知ル所ナリ然ルニ日本政府ガ突然琉球ヨリ清廷
ニ貢物ヲ献スルヲ禁レタルハ抑モ何ノ心ソ
ヤ夫ノ公際ノ公義ヲ破テ小國ヲ抑壓シ正道ニ
背キ人情ニ悖レル処分ヲ行フガ如キハ清廷ガ
取テ日本大國ノ為メニ取ラザル所ナリ苟モ日
本政府ニシテ正道ニ背ムキ人情ニ悖ルヲ厭ハ
ズ交際ノ公義ヲ破テ琉球ヲ抑壓スルヲアテハ
日本政府ハ異日何ノ頗アリテ從來琉球ト交通
スル諸國ノ政府ヲ見シヤ且ツ琉球ハ蕞爾タル

一小国ナリト虽其人民ハ貴賤ヲ論セス一般ニ我が清廷ニ心服スルガ故ニ日本政府ニ於テ強テ之ヲ其版圖ニ加ヘント欲スルモ豈ニ得ベケンヤ云々ノ如キハ寧ロ清使ヲシテ之ヲ取消サシメシトテ冀望シ寺嶋外務卿ハ便チ昨年十一月二十一日附ヲ以テ左ノ回答ヲ清使ニ致サレタリ「貴君ヲ案スルニ閣下ハ嘗テ我が日本政府ニ向テ如何ナル理由ニ據テ琉球ヨリ清廷ニ貢物ヲ獻スルトテ禁シタルカヲ質問セズレテ突然ト無実ノ説ヲ陳シ穩當ナラザル言ヲ吐カレタルモノ、如シ未タ知ラズ是ノ如キ摺合ハ果シテ鄰國ノ交誼ヲ厚クシ日清ノ和親ヲ保ツベキノ方法ナル歟モシ如是ノ摺合ヲシテ貴國政府ノ本意ナラシメハ貴國政府ハ復日清ノ交誼ヲ厚クシ和親ヲ保タント欲スルノ意ナキニ似タリ閣下請フ速ニ余カ言フ所ヲ貴國政府ニ申報シ余ヲシテ貴國政府ノ回報ヲ聞クノ榮ヲ有セシメヨ」

外務省

夫レヨリ八日ヲ閱シ昨年十一月廿九日ニ於テ清使ヨリ再ニ穩當ナラサル答ヲ日本外務省ニ差出シタルニ付キ(其支意ハ概チ前日ノ公答ノ複説ニシテ更ニ新論旨ナク語氣ハ愈々憤激ニ涉リ往々無礼ノ言語アリ而メ寺嶋外務卿ヨリ要請シタル北京政府ニ申報スルノ事ニ関シテハ片言ノ回答ヲモナサズ)寺嶋外務卿ハ便チ簡短ナル答答ヲ清使ニ贈ラレタリ其答書ニ曰ク

琉球処分ノ義ニ付テハ既ニ十一月二十一日附
ヲ以テ閣下ニ答ヘタリ今マタ閣下ノ貴昏ヲ得
タリト虽モ其文意ハ即チ前昏ノ複説タルニ過
キサレハ茲ニ又答述スベキナリ余ハ只分閣
下ニ向テ公道正義ニ拠テ琉球事件ヲ觀察セラ
レンナラ莫望スルノミ云々

後子ニケ月ヲ閱シ本年二月二十六日ニ至リテ
清使ヨリ總理衙門ノ公書ヲ日本外務省ニ傳達
シタレモ其趣意ハ前日清使ノ昏簡ト大同小異
ニモ要スルニ琉球ハ清廷ノ隸属ナリ日本ハ琉
球ヨリ貢物ヲ清廷ニ獻スルヲ禁スルカラズト
云フニ外ナラサルヲ以テ日本政府ハ此上ニ公昏
ヲ往復スルモ無益ノ徒勞ナルベシト思惟メ敢

外務省

テ答書ヲ致サハリシニ清使ハ三月十二日附ノ
公昏ヲ以テ日本官吏ヲ琉球ニ派遣スルヲ勿ラ
ンナラ日本外務省ニ要請シタルニ付寺嶋外務
卿ハ「日本政府ハ琉球人民ノ平和ヲ保タンガ為
メニ緊要ナリト認メタルニ付早ク已ニ処分官ヲ
琉球ニ派遣シタレハ今サテ閣下ノ要請ニ應ジ
難シト答ヘタリ然ルニ清使ハ重子テ五月廿日
附ノ公昏ヲ以テ繰返々シ前昏ノ趣意ヲ複説ス於
是年日本政府ハ最ハヤ多辨ノ益ナキヲ覺リテ簡
畧ニ「琉球ヲ沖縄縣ト改メタルハ實ニ日本政府
内務省ノ行政上ノ都合ニ由リテナリト断答シ
タリ
此時ニ當リ北京ノ總理衙門ニ於テモ亦々日本

政府ノ琉球処分ヲ非論シ頻リニ北京駐劄日本
 公使ニ概合ヒタルヲアレヒ五月十日ヲ以テ恭
 親王及ヒ清廷ノ内閣員ヨリ日本公使宛戸君ニ
 致シタル公啓中ニ琉球ハ常ニ貢ヲ日本ニ納レ
 、ノ旨ハアリ清廷ハヨク其情実ヲ知ルト虽ヒ
 敢テ之ヲ咎メスト云ヒ又々琉球ノ納貢ハ清廷
 ニ於テ甚ク緊要ノ事ナリト考ヘズ云々ノ語ア
 ルニ抑レバ琉球ノ貢物ニ関スル清廷ノ意見ハ
 稍々其面目ヲ改メタルガ如ク又々其啓中ニ琉
 球ハ固ヨリ建國ナリ然ルニ日本政府ニ於テ今
 コレヲ抑壓シテ縣トナシタルハ蓋シ清國及ヒ
 其他万国ニ對シテ無礼ノ舉動タルヲ免レズ
 ヲノ語アルニ抑レバ琉球ノ國柄ニ関スル清廷
 ノ意見モ亦タ少シク其面目ヲ變シタルガ如シ

外務省

明治十二年十月十八日

○琉球事件ト格蘭ト氏ノ關係

格蘭ト氏ハ既ニ清廷ノ内閣大臣ヨリ琉球事件ニ関スル清廷ノ申分ヲ聞キ又タ日本ノ内閣参議ヨリ琉球處分ニ関スル日本政府ノ説明ヲ聞キ兩國ノ事情ヲ審考シテ自ラ其意見ヲ述ベテ曰ク余ハ北京ニ於テ恭親王及々李中堂ヨリ琉球ニ関スル日清ノ紛紜ヲ仲裁マンテ懇請セラレタル時ニ當リ此ノ琉球事件ニ付テハ到底清廷ノ所望ヲ満足セシムルヲ能ハサルベキヲ察知シ恭親王ニ向テ余ハ固ヨリ米國タ一市民ニシテ米廷ノ官吏ニ非ス且ツ今回ノ遊歴ハ私遊ニシテ公遊ニ非ス夫ノ琉球事件ニ関スル

外務省

清廷ノ申分ヲ日本政府ニ関陳シテ日清ノ紛紜ヲ仲裁スルガ如キハ實ニ日本駐劄米國公使トシハム君ヲ煩ハスマキ公務ニ属スルガ故ニ余ハ敢テ此事ニ立入ラザルベシト陳辭シタレモ清廷大臣ガ余ノ仲裁ニ熱心スルノ切ナル遂ニ余ヲシテ余ク琉球事件ニ関繫セザルヲ得ザラシメタリ抑モ琉球ノ事ハ余ヨク之ヲ知ラス清廷大臣ノ関陳ト日本参議ノ説明トニ由テ初メテ琉球ノ事情ヲ審カニスルヲ得タリ而シテ日清兩廷ノ言フトコロ孰レカ曲カ直カハ雙方ノ申分ヲ尚ホ精密ニ考査シタルノ後ニ非ザレバ敢テ容易ニ之ヲ判断スルヲ能ハズト余ハ余ハ何トソ清國ニ向テモ日本ニ向テモ及ブ

キ犬ケノ情誼ヲ尽サント欲スルナリ日本ハ数
年コノカタ非常ノ進歩ヲ實際ニ現ハシ海陸ノ
軍備モ實ニ清國ヨリ行届キタルヲ以テ今モシ
曲直ヲ砲火ニ訴ルニ於テハ清國ハ敢テ日本ヲ
傷害スルヲ能ハザルヤ必セリ故ニ今日日本政
府ノ琉球事件ノ談判ニ於ケルヤ務メテ寛大持
重ノ意見ヲ確執セサルベカラズ而シテ清國ハ
現ニ日本ノ閑明ニ及バザル所アリト虫氏素ト
是レ富源ニ乏シカラザル一大國ナレバ今ヨリ
二三十年ノ後ニ於テ非常ノ進歩ヲ實際ニ現ハ
スモ得テ量ルヤカラザレバ日本ハ敢テ清國ヲ
輕蔑ヤズ成丈ケ之ヲ今日ニ賛助シテ兩國ノ和
親ヲ將來ニ破ラザランコトヲ之レ務メザルヤカ
ラザル也

外務省

グラント氏マタ曰ク日本ガ成丈ケ清國ヲ今日
ニ賛助セザルヤカラザルノ理由ハ何ゾ只ダ前
ニ陳述ヤシ所ノミナランヤ他ニ又タ最モ緊要
ナル理由ノ在ルアリ今モシ不幸ニシテ日清ノ
間ニ戦ヲ開クコトアラハ兩國ノ損害ハ固ヨリ為
レヨリ大ナルハ莫ク為メニ利益ヲ實際ニ占得
スルモノハ蓋シ歐洲諸國ノミ余竊ニ歐洲某國
ノ政略ヲ察スルニ寔ニ東洋諸國ヲ隸屬セシム
ルヲ以テ今日ノ急務トスルモノ如シ而シテ
余カ見ル所ニ於テハ暹羅清國及ヒ日本ニ於テ
ハ現ニ外國ノ輕侮ヲ免レサルノ徵候アリ試ニ
見ヨ暹羅ニ於テハ國王自ラ其國民ヲ治御スル

一能ハズ余ニ向テ暹羅国民ノ阿片ヲ用ルヲ禁
 ヤントヲ請求シ清国ニ於テモ政府ハ国民ノ阿
 片ヲ用ルヲ禁遏スルヲ能ハズ日本ニ於テハ近
 時日耳曼軍艦ノ為ニ其ノ虎列刺病豫防規則
 ヲ破ラレタルトアリ是レ皆ナ国権振ハズシテ
 外国ノ輕侮ヲ受クルノ徵候ニ非ズシテ何ゾヤ
 東洋ノ形勢カクノ如クナルガ故ニ今モシ日清
 ノ間ニ戦ヲ開クトアラバ歐洲諸国ハ其機ニ乘
 シ各々自国ノ利益ヲ計畫シテ日清兩國ノ禍害
 ヲ醸成スルヤ疑ナク之ヲ要スルニ日清ノ互ニ
 争テ相ヒ衰ルハ寔ニ歐洲諸国ノ共ニ欲望スル
 所ナレバ琉球事件ノ如キハ日清互ニ相ヒ容レ
 テ平和ヲ之レ係ケ容易ニ兩國相ヒ戦テ政人ヲ
 シテ漁夫ノ利ヲ獲ヤシムルヲ勿カラントヲ冀
 望ス
 又夕曰ク琉球ノ処分ニ付テハ余固ヨリ曲ヲ日
 本政府ニ歸スルヲ能ハズ且ツ日本政府カ既ニ
 断然ト琉球藩ヲ廢シテ沖繩縣ヲ置キタル以上
 ハ復タ敢テ清国ニ一歩ヲ讓ラザルヲ知ルト虽
 氏余ハ寧ロ日本ノ国権ヲモ犯瀆ヤス清廷ノ所
 望ヲモ峻拒ヤス両全ノ策ヲ以テ琉球ニ関スル
 日清ノ紛紜ヲ和解ヤントヲ熱望スルナリ
 ヨング氏曰ク日本ノ内閣參議カ日光ニ於テダ
 ラント氏ト琉球事件ヲ評議シタル時ニ當リ吉
 田全權公使ハケラント氏ニ向テ凡ソ日本ノ政
 事家ハ一人タリトモ日清ノ和親ヲ保タントヲ

外務省

冀望ヤザルモノ無シ何トナレハ清国ハ実ニ日
 本ノ隣国ニシテ数百年來互ニ貿易ヲ通シ且ツ
 人種宗教文字法律風俗ノ相同シケレバナリト
 明言シ又伊藤參議ハグラント氏ニ向テ氏ガ
 日清ノ和親ヲ全ウシテ兩國ノ獨立ヲ保クシノ
 ント配慮ヤタルヲ厚謝シ且ツ日本政府ノ冀
 望スル所ハ只是レ平和ノニ固ヨリ敢テ争ヲ清
 国ニ挑ムノ意アルニ非ズ幸ニ日清ノ和親ヲ永
 遠ニ保全センコトヲ欲スルノ外マタ他念ナシト
 閑陳マラレタリ
 琉球事件トグラント氏ノ關係ハ概テ右ニ如シ
 讀者請フ我輩ガ去ル十五日ヨリ三日間ノ紙上
 ニ分載シタルヨレダ氏通信ノ要畧ヲ通讀セバ

外務省

蓋シ琉球事件ニ関スル清廷ノ申分ヲ知リグラ
 ント氏ノ意見ヲ覺リ又我ガ政府ノ政畧ヲ察
 スルニ足ルヤシト信スルナリ

明治十二年十月廿二日

琉球、閩繫

曩ニ琉球藩ヲ廢シテ新ニ沖繩縣ヲ立テタルハ
勢ノ然ラシムル所ナリ政府ノ意ニ非ザル也
ハ吾曹己ニ當時ニ於テ之ヲ論シタリキ抑モ此
勢ヲシテ然ラシムルニ至ラシノタル者ハ琉球
西屬ノ論ニ閩繫シテ清國ト我邦トノ間ニ起リ
タル議論ノ邊ニ其局ヲ結フニ至ラザルヲ以テ
我政府ハ寧口斷行主義ヲ行フテ清國ニ葛藤ヲ
醸スモ此ノ西屬論ノ為ニ我帝國ノ体面ヲ傷ク
可カラズ我獨立國ノ権理ヲ干渉セラル可カラ
スト決シ以テ其斷行ヲ取ル者ニ是レ因ヤシラ
知ル也然ルニ此斷行ハ果シテ清廷ノ喜ハザル

外務省

所ヲ招キ遂ニ現時ノ差詰ノタリ摺合ニ涉リ一
且清廷ガ其中裁ヲ米國グラント氏ニ内談ヤシ
ヨリ忽ニ其論旨ヲ米國々新聞紙ニ表白セラレ
天下ノ拳ヲ詳悉スル所トナレリ
讀者ハ吾曹ガ前日ニ閩演ヤシ琉球閩繫ノ一篇
ヲ讀ミテ必ラズ兩國ノ間ニ於テ云何ノ摺合最
中タルカヲ詳ニシタルバシ夫ノ報道ハ嚮ニグ
ラント氏ニ隨行ヤシ書記官ヨング氏ガ其出身
ノ本社タル新約克ハラルド新聞ニ報告ヤシ所
ニシテヨング氏ハ実ニグラント氏ノ起居住タ
レバ其事實ヲ失ハザルハ吾曹ト虽氏之ヲ信依
ヤザルヲ得ズ己ニ之ヲ信依スル以上ハ清廷ノ
摺合振ノ如キ最モ吾曹ガ今日ニ其目的ヲ審ニ

スルヲ能ハサル所タルヲ奈何ヤ
 從來ノ実験ニ拠リテ之ヲ證スルニ原來清國ノ
 朝廷ノ外交ニ於ケルヤ常ニ遷延ヲ以テ談判ノ
 第一秘訣トナシ尋常瑣末ノ事柄ノ裁合タリ所
 其往復ニ少ナクモ數週若クハ數月ヲ費ヤシ敵
 手ヲシテ裕ニ所謂待草臥ニ辟易セシメ肝腎
 ナル可否ノ決答ニ至リテハ概テ之ヲ曖昧ニ附
 シテ其機會ヲ遷延ヤシムルヲ以テ得意手段ト
 ナスニ付キ歐米諸國ヨリ發遣セラレタル老練
 ノ公使等ト魚尾往々此手段ニ困却セルコアリ
 是レ清廷官吏ノ外交ニ於ケル困難ノ談判ニ涉
 リテモ思ノ外ニ防禦方法ニ巧ミナル所以ナリ
 然ルニ今コノ琉球談判ニ涉リテハ忽然其平常
 ノ手段ニ變リ却テ我邦ニ向テ決答ヲ促シ頗ル
 攻撃方法ヲ採ルガ如キノ色アル者ハ抑モ何ソ
 ヤ蓋シ渠レ常ニ遷延術ヲ以テ防禦方法ハ長伎
 トナスニ付キ今回ハ我邦ヲシテ此伎倆ニ倣フ
 不能ハザラシメント欲スルガ故ナルベシ果シ
 テ然ラバ吾曹ハ渠ガ眼光ノ我國勢ヲ觀ルニ迂
 遠ナルヲ憐マザルヲ得ス如何トナレハ則テ維
 新以來我邦ノ政畧ハ大事ヲ咄嗟ノ間ニ決シ敏
 捷處辨ヲ以テ長伎トナスニ因リ渠カ今日ニ於
 テ我ニ望ム所ハ却テ我ヲシテ我が伎倆ヲ專ニ
 ヤシムルノ結果ヲ得ベキガ故ナリ
 吾曹熟々清廷ノ云フ所ヲ察スルニ渠ハ明カニ
 琉球ヲ以テ兩屬國ト認メタリ渠ハ琉球ノ朝貢

外務省

ハ毫モ其実益ニアラザルトヤリ渠ハ琉球ヲ失
 フノ実ヲ惜ムニ非ズ其名ヲ惜ム者ナリトヤリ
 渠ハ琉球ヲノ従前ノ旧貫ニ仍ラシメントラ望
 ミタリ清廷ノ主論トスル所ハ決シテ是ニ外ナ
 ルニアラザル也其類ニ古史ニ徴シテ明祖ノ洪
 武年間ヨリ琉球ガ支那ノ封冊ヲ受ケ支那ノ正
 朔ヲ奉スルヲ確證トシテ云々争ハント企ツレ
 氏若シ證拠争ニナラバ我邦ニテモ決シテ渠ニ
 劣ラザル程ノ確證ニ富ミ歴々文獻ノ徴スベキ
 者アレハ詰リ無益ノ考證タルニ過キサルノミ
 清廷ト由氏總理衙門人材ナシトセズ豈ニ此事
 ヲ明知セザランヤ儲テ現時清廷ガ我ニ望ム所
 ノ結局ハ琉球ヲシテ曰ニ依リテ兩属ノ王国ト
 外務省
 ラシメント望ムノ一點ニ歸スル者ナリト由氏
 若シ其撮合ニシテ我政府ノ聽カザル所トナラハ
 清廷ハ如何ナル決著ヲ取ルノ心得ナル乎是レ
 吾曹カ最モ今日ニ推知ヤントヲ要スルノ主點
 ナリ若又清廷ニシテ萬一兵戈ニ是非ヲ訴ハン
 ト決著ヤハ我政府ハ應兵主義ヲ以テ之ニ應ス
 ルノ心得ナル乎是コト吾曹ガ最モ今日ニ推知
 ヤントヲ要スルノ主點ナリ但コノ主點ニ関シ
 テハ吾曹敢テ之ヲ黙々ニ附スルニ忍ヒス近日
 ラ以テ閱演スル所アラントス
 然レ氏恭親王李鴻章諸人カ曾テ北京ニ於テク
 ラント氏ニ内訖シタル情ヲ察スレハ彼ノ諸人
 ハ決シテ我邦ニ向テ干戈ヲ動カスノ念慮ヲ懷

クニアラス今日ノ形勢ニ於テ日清兩國ノ戦ハ
乃ケ鹵蚌ノ争ニシテ漁夫ノ利タルベキハ必然
タリ彼ノ諸人固ヨリ之ヲ詳ニセザルニ非ザル
ナリ是ヲ以テ彼ノ諸人ハ葛藤連結シテ解ケス
兩國ノ休戚ニモ関係ススベキノ場合ニ至ラバ
公平ノ外廷ニ中裁ヲ求ムルノ所存ヲ以テグラ
ント氏ノ来遊ヲ幸トシ豫シメ其方畧ヲ理ラサ
ントシタル者ノ如シ是レ大夕静穩ヲ旨トフル
ノ所存ニシテ感賞スベキ方畧ノ如シト雖氏若
シ一步ヲ進ミテ考フレバ今ヤ東洋合縱シテ西
洋ニ向ヒ專ラ其干涉ヲ免ルベキノ急時ニ當リ
却テ其中裁ヲ外邦ニ求ムルハ取リモ直ヤス其
干涉ヲ求ムル者ニアラスヤ尤モグラント氏ノ

外務省

如キハ今官外ノ人ニシテ国事ニ干涉スベキ地
位ニモアラズ又米國ノ如キハ中裁ヲ托ヤラル
、氏其ヲ機會トシテ干涉ヲ東洋ニ求ムルノ国
是ニモアラザルハ吾曹深ク之レヲ信スレ氏抑
モ清廷官吏カ外國ニ中裁ヲ望ムノ方畧ハ交戦
ニ比スレハ則チ可ナリ東洋政畧ノ主眼タル外
國ノ干涉ヲ脱スルガ為ニハ則チ不可ナリト言
ハザルヲ得ス到底琉球ノ事タルヤ東洋政畧ノ
大局面ヨリ觀レハ日清兩國間ノ小事ナルニミ
之ヲ取ルモ榮トスルニ足ラス之ヲ失フモ辱ト
スルニ足ラサルノミ而シテ我邦ガ騎虎ノ勢ニ乘
シテ其隸屬ヲ廢シテ縣治トナセシモ得策ニア
ラザレ氏夫レカ為ニ清廷及ヒ其公使カ頻ニ切

迫ノ掛合ヲアサント欲スルハ又更ニ得策ニ非
ザルナリ此小事ノ掛合ニ懸礙シテ東洋政畧ノ
大主眼ヲ失フカ如キハ吾曹が大ニ日清西国ノ
当局者共時論家ノ為ニ取ラザル所ナリ。

外務省